

現在おこなわれている周辺村落の囃子

東 資子

ここでは、以前に曳山祭でシャギリを担当していた近郊の村落のうち、現在活動している長浜市唐国（旧虎姫町）でのハヤシ（囃子）の活動の経緯を昭和四年生まれのH氏の話から記す。そして、現在の活動を紹介し、曳山祭のシャギリとの比較をおこなう。

① 唐国におけるハヤシの活動の経緯

(1) 唐国笛声会

唐国では、大正期には「ハヤシ」ができる人たちがいたが、その人たちが戦争に行くなどしていなくなり、昭和期に入ると演奏されることはなくなった。昭和四年生まれのH氏も子どもの頃はハヤシを聞いたことはなかった。

昭和二二年、戦争から帰ってきたT氏（明治末か大正生まれ。当時四〇歳前か）が一人で若い人に笛を教えるようになった。家で農業をしていた当時一八歳のH氏は、「やってみないか」と誘われ、近所の同年代の人たちと練習に行ってみた。笛を吹くとすぐに音が出て、「先生」からも「いい」といわれたので、おもしろくなった。結局、その年の一二月から翌年四月までの農閑期の五ヶ月間、毎日練習に通うことになる。「今日行かないでおこう」と思っているも、友達が笛を吹きながら誘いにくると支度を始めてしまい、家の人から「やっぱり行くのか」と笑われていた。

当時は最大で一〇人くらいが一緒に習っていた。T氏が「一節（ひと

ふし）」を吹き、生徒はそれを覚えて帰って家で練習し、つぎの日に一人ずつ吹かされた。楽譜はなく、T氏の笛を聞き、「うーひよう」などと「口ずさみ」（口唱歌）をして、指を見て、覚えた。わからない場所は質問すれば教えてくれるので、それを家で練習した。太鼓は、T氏が特に一人に教えていたが、H氏も見よう見まねで練習していた。太鼓には「口ずさみ」がなく、叩いているのを見て覚えるしかなかった。そのような練習だから、何度か参加する人はいいても、続く人は少なく、結局四、五人しか残らなかった。T氏を中心としたその集まりを唐国笛声会（てきせいかい）とっていた。

その頃は、夏になるとH氏たちは毎日夕涼みに国道に出て、笛を吹いていた。吹いていると近所の人たちも集まってきて、聞いていた。

昭和二四年からは、長浜曳山祭に行くようになった。T氏に依頼が来て、笛声会で鳳凰山に上がった。太鼓をT氏が叩き、五人くらいで笛を吹いた。H氏は翌年に体調を崩し、それ以降はハヤシに参加しなかったが、笛声会はその後も五年ほど長浜に行き、壽山、孔雀山などへ上がった。しかし、三〇年代には長浜からの依頼は途絶えた。長浜以外にも米原曳山祭、敦賀の祭り、彦根のパレードなどに呼ばれたが、これらは一回限りの依頼であった。

昭和三〇年代にT氏が亡くなり、昭和四〇年代にはハヤシを演奏する機会もなく、笛声会の活動は途絶えた。

(2) 唐国囃子（はやし） 太鼓保存会

昭和末頃に「やっぱり、伝統を途絶えさせるのは……（いけない）」と、残った笛声会のメンバーでハヤシを再開した。メンバーは四人で、H氏ともう一人が同年代、ほかの二人がもう少し年下だった。唐国会館

に集まって練習をおこない、若い人たちに声をかけて教えた。

平成四年に宝くじ助成事業の補助を得て、太鼓を一台・しめ太鼓を三張・すり鉦を五個・笛を三五本・ハッピーを三五着購入した。笛などの楽器は長浜市朝日町のM太鼓店に頼んだ。「笛声会」の団体名で申請したが、ハッピーに名前を入れることもあり、新たに「唐国囃子太鼓保存会」と名称をつけた。さらに平成九年には日本生命の助成を得て、太鼓をもう一台購入した。そのときの申請団体名は「唐国村おこし囃子（はやし）太鼓保存会」にした。

長浜市下八木町（旧びわ町）の祭りに出たり、敬老会で演奏したりしながら、唐国の小学生を集めて教えたり、新たなメンバーを募集して教えたりした。当時の募集は子どもを含めて男性に限っていた。しかし、笛の音を出すのは難しく、また「口ずさみ」での曲の習得には時間がかかるせいか、新しいメンバーが会に定着することはなかった。

平成七年頃には、長浜の囃子保存会から調査がきたので、演奏を録音してテープを渡した。唐国会館での録音は、音の大きさの調整に苦勞し、音が小さくなるように太鼓は二階で叩き、それに合わせて一階で笛を吹いてラジカセで録音した。

その後、メンバーが亡くなるなどして、現在、元気でいるのはH氏だけとなった。H氏は、何とか唐国のハヤシを次の世代に伝えたいと思っている。

(3) 社戯里, S（しやぎりーず）の結成

平成二十一年からは、H氏のもとで二〇歳代から五〇歳代までの女性たちがハヤシを練習している。彼女たちは元虎姫町の社会福祉協議会の職員である。長浜市への合併にともない、虎姫町社会福祉協議会が解

散することになり、その解散式の出し物としてH氏にハヤシを教えるほしいと頼んだのである。以前にH氏たちが文化ホールでハヤシを演奏したことがあり、そのときに聞いた笛の音が印象に残っており、あんなふうには吹けたらいいと考えたのだという。頼まれたH氏は「（女性でも）やってくれるならいい」と思ったという。唐国では、女性がハヤシするのは初めてのことだが反対する人はいなかった。

六人の女性たちが平成二十一年の九月から笛の練習を始めたが、二ヶ月間は音が出ず、「シャージャー」と鳴るだけだった。「エアーシャギリ（音はラジカセで流す）でもいい、ハッピーだけ着たらなんとかなる」と聞き直って続け、音が出たのは解散式が行われる一月になってからだっ

た。それ以降、平成二三年の現在まで練習を続けており、「ボランティア交流会」や「敬老会」などで演奏を披露している。集まりを「社戯里, S（シャギリーず）」と名付け、サークル活動として登録した。それまでの職場の仲間が離れ離れになるのが寂しかったので、笛の練習をみんなが集まる機会にしたのだという。

新しいメンバーの募集もおこなっており、米原のハヤシ経験者の女性一人が新たに加わり、見学にくる人もいる。

社戯里, Sのメンバーは、旧長浜市や旧湖北町などの住民であり、唐国の住民は一人しかいない。H氏は、「唐国の伝統」というが、それで構わないのかと尋ねると、「お年寄りたち喜ぶから（それでいい）」という。

② 唐国のハヤシの現在（社戯里, SとH氏の指導）

(1) 練習

社戯里、Sは、第二、四月曜日の一九時半から二二時まで唐国会館で練習をおこなっている。まず、新しい曲を覚えるときには、「口ずさみをやらなくてはいけない」とH氏はいう。口ずさみによって曲を覚え、指使いを覚えれば、吹けるようになるそうだ。口ずさみは、T氏から教えられたとおりに伝えている。「御遣り」・「神楽」・「戻り山」は、それぞれ笛の音としては同じ音を使うが、「ウーヒョウウヒョ」や「ヒョロロ」、「ヒヤチヒリ」など、口ずさみはそれぞれに違う。そして笛を吹くと確かに口ずさみのおりに聞こえるので「よくできている」とH氏はいう。メンバーは、長浜の譜面(ドレミ)での教え方を聞くと、「そうやって教えて欲しかった」という。唐国の方法では、曲が覚えにくく、音も揃わないので大変だという。しかし、「これからこの方法でいきますか?」と尋ねると、「これで(口ずさみと指使いの楽譜)」「(それが)このやり方」とみなが答えた。

平成二三年一二月の練習では、「御遣り」・「神楽」の順で何度か吹いたあと、「戻り山」を演奏した。一曲をとおして吹き、わからないところをそれぞれが質問し、H氏が何度も吹いてみせるという形で練習は進められていた。

「戻り山」はまだ吹けない人が多い。そのつぎは「ホエンマ(奉演間)」を習得する予定。演奏する機会がないので「起し太鼓」を教えるつもりはないとH氏はいう。起し太鼓で演奏した曲は、「別嬪太鼓」といった。だれも長浜曳山祭は見たことがないので、祭りのどのような場面ですれぞれのハヤシが演奏されるかわからないという。

「御遣り」・「神楽」を四、五回吹いたあとには、楽譜作りがおこなわれ

る。後述するようにメンバーたちは楽譜を作りながら、曲を覚え、さらに楽譜を演奏の実態と合ったように書き換えていく作業を練習のなかでおこなっている。

月に二回の練習だが、それでも全員が揃うことは難しい。H氏は、できれば毎週練習してほしいが、できないのは仕方がないと思っている。メンバーたちもH氏が練習量が少ないと思っっているのはわかっているが、現在の量で充分と考えている。家で練習してくることもない。仕事やほかのこともあり、そのなかで続けられればいいと考えており、なによりみんなで集まるのが楽しいそうだ。

メンバーたちは、部屋に入るとき、練習が終ったときには、正座して両手についてH氏に向かって挨拶をする。H氏を「おししようさん」と呼び、「芸事」の師匠だからという。ハヤシは芸事として、音楽として楽しいのだという。しかし、H氏へ礼金などは払っていない。ただ、それまでは免除してもらっていた会館の使用料を今年(平成二三年)から人数割りして支払うようにした。

(2) 楽器

H氏は、全員にまず笛を教えた。しかし、最初から息が続かず、「できない」という人がおり、その人がすり鉦の担当になった。

太鼓は、H氏が叩いている。初めから「叩きたい」という人がいたが、「まだ早い、まず笛から」と、H氏は笛を教えた。H氏は、将来はその人が叩くことになるだろうという。

メンバーは、最初はH氏が渡してくれた「唐国囃子太鼓保存会」で購入した黒い笛を使っていた。なかなか音が出ず、吹くのが難しかったという。長さ四〇・五センチ、直径一・五センチの七ツ穴の笛。唄口ま

では五センチである。現在は、囃子保存会と同じ笛を使っている。黒い笛では音が出しにくいというので、H氏は長浜で探して囃子保存会が仕入れている笛を買ってきた。まだ半年ほどしか吹いていないが、吹きやすいという。

H氏は、昔、先生の笛の穴に合わせて自作した笛を使っている。七ツ穴の間隔は、囃子保存会の笛とほぼ同じである。

(3) 楽譜の作成

H氏は、ハヤシの練習を再開した平成初め頃に「口ずさみ」（口唱歌）をワープロで書き表してみた。T氏から教わったとおりかどうか、ほかの人にも確認しながら作った。

しかし、平成二二年に初心者の女性たちに見せると「これではわからない」といわれる。そこで、長浜の囃子保存会が作成した教本の『長浜祭曳山ばやし』の最初の頁にあった指使い表を参考にして、笛の形を並べた用紙を作り、それに指の動きを書き入れていった。指使い表には笛が横に書かれているが、縦にならべて楽譜のようにした。指を開けたり閉めたりして震わす音は、すぐ隣に穴の図をたして、指を開け閉めするとわかるように工夫した。

まずH氏は「御遣り」を作ったが、A4の紙に二段に笛を並べて書いたので、一曲分が何枚にもわたり、上下二枚、横に何枚も繋ぎ合わせたので巻物のようになり、演奏しながら楽譜に沿って移動しなくてはならなかった。メンバーたちはそれを縮小コピーにかけ、A3一枚に収めるように作りなおした。作りながら確認もしていき、指の押さえ、「うーひょう」の言葉なども少しずつ変わっていった。

二曲目となる「神楽」の楽譜は、メンバーたちが中心となって作った。

H氏の指使いをビデオで撮り、音をカセットやCD、MDで聞きながら、笛の形に書き表していった。H氏の指使いが、技巧なのか、たまたまそうなったのか、「それは何ですか？痙攣ですか？」といちいち質し、「ピロピロ」（遊びの部分）も譜面に書き加えていったという。H氏は、普段の演奏では穴の開け閉めの動きは小さい方がいいのだが、わかるように大きく指を動かし、見せるのが大変だったという。平成二三年一月には、「神楽」がようやくでき上がり、「戻り山」を作り始めたところであった。その後、一二月に「御遣り」の最終版ができるなど、吹きながら楽譜の見直しもなされている。

③ 唐国の譜面と『長浜祭曳山しゃぎり』との比較（「御遣り」）

表のように唐国の「御遣り（最終版）」の譜面（以降、「唐国」とする）を囃子保存会の教本『長浜祭曳山しゃぎり』（以降「長浜」とする）に対応させてみた。

「長浜」の五線譜は、音符を簡単に表すために任意の記号と階名（ドレミ）で表した。唐国の譜面は、口唱歌と笛の押さえ図だけが記されたものだが、『長浜祭曳山しゃぎり』で示されている音階に基づいて対応する階名（ドレミ）も記した。「数字」は、わかりやすいように加えたものである。

(1) 「唐国」にはあるが、「長浜」にはない音

1 一音で出す音

「唐国」にはあるが、「長浜」にはない音は、二つある（図1）。使われる場面は少なく、①は五回、②は三回である。①の音は、ミの周辺と思われるが、「長浜」の楽譜にはない裝飾音として〔2〕、〔16〕、また「長

浜」のレに対応する音として〔6〕、〔12〕、〔15〕使われている。②は、ラに装飾をつけて吹く音(図2)の後にすべて置かれている。

2 装飾音

「ビヤララ」などと口唱歌で表現される装飾音は、「長浜」にある音階から指を開け閉めして音を出すため、「長浜」どおりに単音で吹く場合とは異なる音となる。

長浜でも楽譜どおりではなく、遊びを入れて吹くことはある。ただ、それは個人の裁量により、みなが揃って装飾音を入れることはない。

(2) 楽譜の上での「長浜」とは異なる表現

1 「唐国」は「長浜」より多くの音を使う

「唐国」は装飾音が譜面化されているため、単音のみの「長浜」より多くの音が譜面に書かれている。一音に対して音を一度振るわせる場合〔1〕のソなど、一音に対して何度も音を振るわせる場合〔3〕の後半など、そして「長浜」では、入れられていない音を入れる場合〔5〕の始まりなど)とがある。

2 「長浜」とはリズムや音階が異なる

「長浜」では〔1〕、〔2〕は、繰り返しだが、「唐国」では、リズムも音階も変わっている。そのため当然、口唱歌も「ウ ヒョ ヒョ ウ ヒョ ヒョ ウー ヒョ ウー ヒョ」と、「ウ ヒョ ヒョ ウ ヒョ ヒョ ウー ヒョ」と異なっている(図3、図4)。

音階が変わる場合もあり、図5のように「長浜」のラに対しては、「唐国」ではソが対応する場合が多い(他にも〔7〕、〔8〕、〔9〕、〔10〕など)。

(3) 口唱歌

「唐国」は、笛の形で指の押さえ方を示し、それに対応する口唱歌を

書いている。

口唱歌のみの譜面もあるが、現在では使われていない。口ずさむための覚えであるが、実際には音を乗せた口伝えで教わり、口伝えで覚えていないとわからないと、メンバーは言う。

「ウ」「ヒョ」などのことばは、音階に対応するのではなく、リズムを表している。ただ、基本の音とリズムは関係しているため、結果的に低いミが「ウ」で表現されることが多い、「チ」は高いドやミである、などある程度の対応はある。「ビヤララウ」など、楽譜では示しにくいリズムのあやの部分まで伝えることができている。

書き出したものは、H氏が覚えたままを書いたので装飾音なども入っているが、譜面を作るときには落とされている。(たとえば、出だしの一節は「ウーヒョ、ヒョウ、ヒョ、ヒョウ、ヒョー、ヒョ」と書かれているが、最後の「ヒョ」は飾りなので、譜面には書かれていない。)また、「ヒヤ」とされていた部分が、「ヒヤン」と書きかえられるなど、H氏の演奏や口唱歌の聞こえ方を反映させて、メンバーたちによって譜面が更新されていっている。

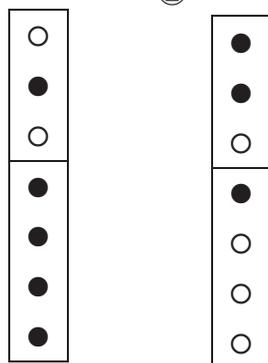


図1

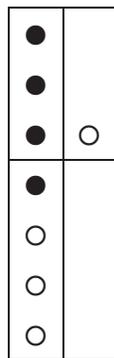


図2

「長浜」

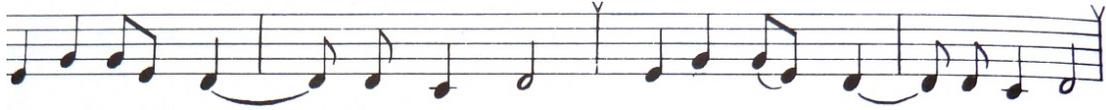


図3

「唐国」

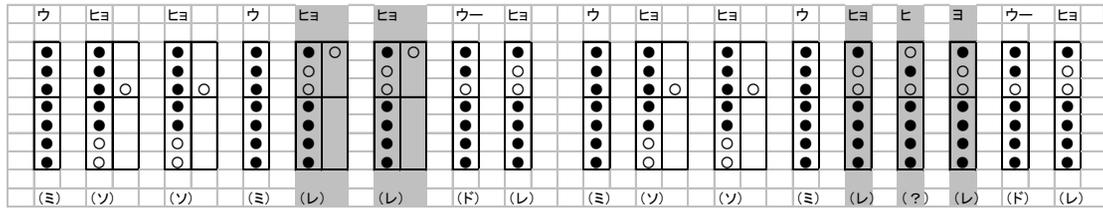


図4

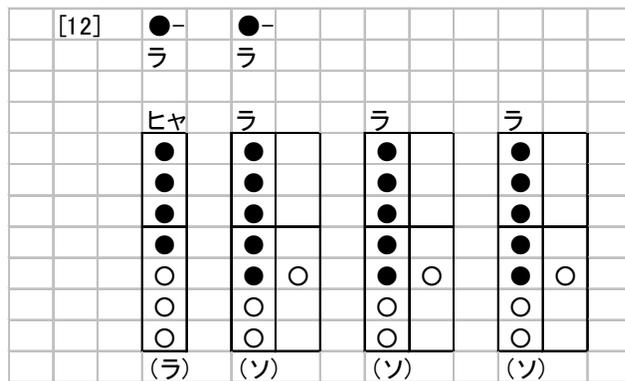


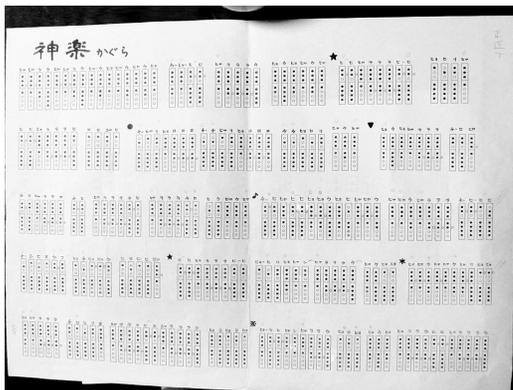
図5



囃子（唐国）唐国譜面作り。生徒がH氏の指使いを見て楽譜を作る（平成23年11月24日19:54撮影）



囃子（唐国）唐国練習H氏が太鼓を叩き、生徒が笛を吹く（平成23年10月24日20:10撮影）



囃子（唐国）A4用紙をつなげた楽譜をA3用紙にまとめたもの（平成23年10月24日20:58撮影）



囃子（唐国）A4用紙をつなげた紙に、笛を並べて描いた楽譜（平成23年10月24日20:27撮影）

